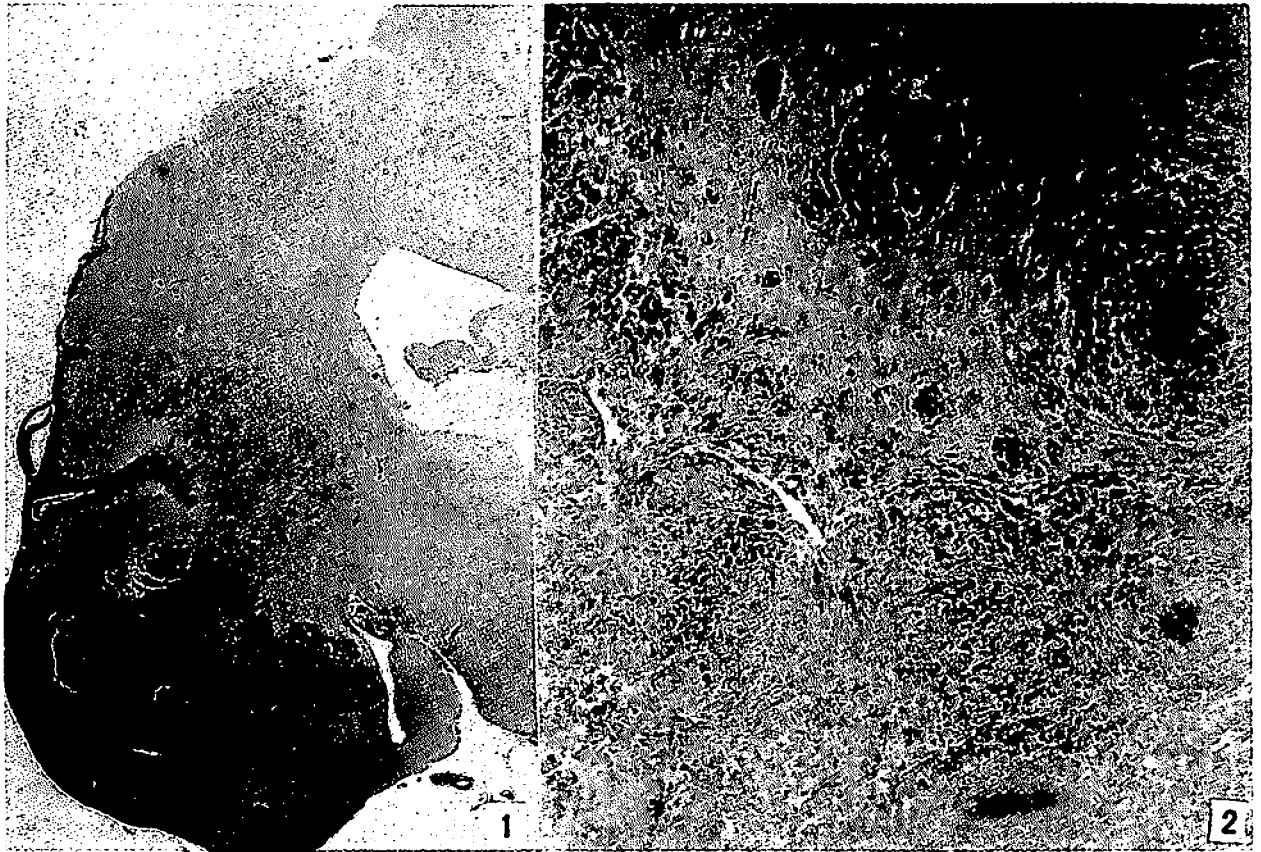


# 犬の脳の腫瘍性細網症

東京農工大学農学部家畜病理学教室出題 第16回獣医病理学研修会標本 No.252



動物：犬，コリー種，6才，牝。

標本：ホルマリン液固定，梨状葉が含まれる大脳の全横断面，H-E染色。

臨床：取り扱い者である東京都府中市開業宮本譲が，81回獣医学会（講演要旨201頁）で報告した。全経過は約5ヶ月で，最後は昏睡状態で安楽死が行われた。

剖検所見：高度な消瘦（正常ならば30kg以上であるのが17kg）と，犬糸状虫約20匹寄生による病態以外には，大脳にのみ著変があった。脳の摘出時において，背面硬膜の遊離，骨性テントが大脳横裂に残存，左右，特に右側後頭葉の隆起，大脳溝の扁平化，嗅球の完全遊離，下垂体の半遊離，視神経交叉の左方転移，小脳テント孔硬膜の鈍角化等の病変を認めた。右半球前位腹側の脳実質内には，約3.5×2×1.5cmの類紡錘形を呈し，灰白色，

脳組織よりも硬度のある腫瘍塊が，皮質軟膜面と側脳室側下部に接しつつ存在し，前部は内外側嗅索にはじまり，嗅脳溝やジルビウス外溝に沿いつつ，後部は梨状葉において右側脳室腹角に達している（写真1）。脳摘出時の肉眼的病態は，この腫瘍性増殖が大脳全体を，左後方向に圧迫していたことを示すものと考えられた。

組織学的所見：14回No.212標本（日生研たより，21巻6号）と全く同様であり，組織球性細胞の既存血管周囲性増生が病変の主体である（写真2）。今回の材料には，異型の多核巨細胞が散在する反面，ラッセル体形成にまで分化し得る多数のプラズマ細胞が参加していた。

討論：封入体の有無や，細網症なる命名の意義についての簡単な討議がなされた。